JLreq-dのスコープとモデル

機能論的アプローチへのメモ

デジタル時代の書記とは蓄蔵された情報の２次元平面へのダイナミックな配置である

“writing is storage of information”.

※Albertine Gaur “A History of Writing”(the British Museum, 1984, 1992

※※日本語訳として「文字の歴史—起源から現代まで」矢島文夫他訳,1987があるが、そもそも書名としてアウト。小松英雄も、この日本語訳を、下記の書物で、痛烈に批判している。

「書記とは情報の蓄蔵である」

※小松英雄による日本語訳（「日本語書記史原論補訂版」2006）

Gaurも小松も、言語を対象とする研究者である。それゆえ、彼らにとってのinformation/情報とは、（広い意味での）言語そのものであろう。

しかし、JLreq-dが対象とする情報は、（広い意味での）言語のみならず、従来の書物を構成してきた、図版(figure)、図表(table)、画像(photo, illustration)も含まれる。

Gaur/小松の謂を、この章の文脈でparaphraseすると、JLreq-dが対象とするのは、文字とその他の視覚的情報要素を、２次元平面にダイナミックに配置することとなる。

※JLreq-dにとっての２次元平面とは、巻物やbrowserのスクロール画面のような、幅（横書きの場合）や行長（縦書きの場合）決まっており、長さが不定なものを想定している。

Gaur/小松にとってのwriting/書記とは、それが書かれた時点で２次元のstrageとして視覚的に固定化されるが、JLreq-dにおいては、情報が視覚的に２次元の平面に立ち現れるのは、それが読まれる瞬間であり、読まれた後は、消え去ってしまう。

ある言語のある時代におけるwriting systemは、情報が書き記されるメディアの制約を受ける。

情報が石に刻まれた時代にはその時代の、木簡や竹簡に記された時代にはその時代の、（高価な）紙に記された時代にはその時代の、それぞれのwriting systemがあった。

夏目漱石は、その多くの作品を発表した朝日新聞に文芸記者として入社した際、畏友橋口五郎にデザインを依頼して、19字10行詰めの専用の原稿用紙を作成した。

原稿用紙は、日本や中国の写経の伝統を受け継ぐものであると同時に、漱石が採った1行19字詰めという字数は、当時の朝日新聞の1行の字数を模したものでもあった。

夏目漱石によって、近代的な日本語が産み出されたのだとすれば、日本近代のwriting systemも、五葉による原稿用紙と当時の朝日新聞の組版様式によって産まれたといった言い方が出来るかもしれない。

ワープロの初期に、20字×20行の縦書き原稿用紙を模した画面に、文字を埋めていくというスタイルのUIが現れたことがある。人口に膾炙する新メディアは、必ず旧メディアの模倣/残滓の要素を持っている。

現今、多くの職業文筆家が、ワードなどのPC用ワードプロセッサーアプリケーションを用いて横書き40字程度詰めの設定で原稿を書き、それを、編集者とページネーション技術者が、縦書き40字余りの版面に、配置している。

最初のJLreqが目指していたのは、この時代の、即ち、基本版面を前提としたDTPメディアのための、writing systemの顕現であった。

JLreq-dは、ページ概念を捨象する。

JLreq-dが対象とする表示装置は、一定の高さと幅を持った２次元の矩形平面だが、その背後に、仮想的な可変長/可変幅の２次元平面を想定している。

JLreq-dにとってのwriting systemとは、蓄蔵された情報を行長（幅/高さ）を持ち、行数が不定な２次元の空間にdynamicに配置することにほかならない。

JLreq-dが対象とする情報（原稿）は、まさにボーンデジタルなファイル形式を想定している。

典型的なファイル形式をいくつか例示すると。

docx、HTML、md、txt、cssなど。

では、2次元の矩形空間に配置される対象となる情報とは何か。

JLreq-dの対象となる情報。

Information ::= 文字列|文字列以外の視覚要素

文字列 ::= 本文データ|本文データ以外

本文データ ::= 本文|見出し|引用

見出し ::= タイトル|大見出し|中見出し|小見出し

本文データ以外 ::= メタデータ|注釈|参照

メタデータ ::= タイトル|著者|発行年月日|版元etc

※注釈==note 参照以外

※参照==reference 他の情報へのリンク情報

文字列以外の視覚要 ::= 図|表

本文データとそれ以外のデータの関係は、有向グラフやXMLやHTMLなどの構造化言語のリンクで関連づけられる。

機能論的立場とJLreq-dにおける情報要素

著者/編集者にとってのwriting system

JLreq-dでは、配置される情報要素の名称は、従来の日本語組版に用いられる名称を踏襲している。

しかし、基本版面の桎梏から解き放たれたJLreq-dにおいては、もはや意味をなさない論点もある。（⇒敏さん、泣き別れや辞書組版の前行への送り返し?など）

また、従来の組版（特に活版）では、物理的に実現不可能であったために、組版⇔校正段階で排除されていた（無謀な）指定を何らかの実現方法で処理する必要が生じる場合がある。（⇒敏さん、やたらと長いルビの処理など。Ellika泣かせなものども）

JLreq-dでは、配置される情報要素の名称に、従来の日本語組版で用いられる名称を踏襲しているが、それぞれの情報要素の内実/機能を勘案したとき、その実現方法が最適であるとは限らない。

JLreq-dは、従来のJLreqを批判的に継承している。すなわち、JLreq-dは、従来のJLreqと全く同じではなく、多くの相違点を持つ。

最大の相違点は、基本版面の有無である。

基本版面の概念を捨てて、スクロールモデルを採ったことにより、多くの相違が生じる。また、活版時代の残滓と思われる要件については、大胆に捨象している。

このような立場を理解していただいた上で、著者/編集者に求められる要件がある。

* ルビ

ルビは、多様な機能を持つ。読み、注釈、多言語への翻訳など

いわゆる振り仮名以外は、他の表示要素で代替する可能性を探るべきかも。

また、特に、振り仮名機能については、視覚障害者のアクセシビリティへの配慮が必要。

* 両側ルビ

両側ルビなんて、指定するなよな、このバ〜カ❗

* 割り注

割り注なんて、指定するなよな、このバ〜カ❗

* 注の配置

⇒敏さん、考えて❗

敏さんによる注釈の機能分析

1　言葉，事項の説明

1.1　言葉そのものの説明

＊古典ものや漢文での語句の解釈だけでなく，すこし以前の文学作品（例えば，谷崎潤一郎）などで，若い人向けに注を付けている例をよくみかけます．新潮文庫などでは，巻末に後注で示す例が多いが，最近は，縦組の本で見開き単位で，その左端に示す傍注が増えてきたように感じている．

＊簡単な場合，その箇所に括弧書きで示してしまう方法もある．

1.2　地名や人名の補足説明

＊地名・人名，特に人名の生年，没年を割注で示す例がある．教科書では行間注で処理する例もある．

1.3　ある用語・言葉などを，別の言語で示す．

＊ある用語を英語等で示す場合，一般に括弧書きで示すが，その言語の読みを片仮名のルビで示す方法もよく見かける．

1.4　略語を正式な綴りで示す

＊この場合も一般に括弧書きで示す例が多い．

1.5　事柄そのものの説明

＊初心者用の経済学等の本では，用語の説明を注記で示している例もある．こうした用語の説明を縦組の書籍で行う場合，脚注で示す例をよく見かける．Webでは，これはポップアップでやるのかな？

1.5　校訂上の問題，文字の異同など

＊漢文，古典ものなどでは，校訂上の問題，文字の異同など，語句の解釈とは別形式の注で示す例をよくみかける．

2　説明事項の典拠

1.1　本文の説明事項の根拠を書籍，雑誌論文等で示す．

＊この場合は，その箇所ごとに注記で典拠を示す方法と，その箇所では“（著者名，刊行年）”で示し，巻末等の参考文献一覧との対応で示す方法とがある．

1.2　本文の説明事項の根拠をWebのURLで示す．

＊この方法は，最近はよく見かけるようになった．

1.3　本文の説明事項の根拠を対話，あるいは取材，その他の方法で，どのように入手したかを示す．

＊ノンフィクションだけでなく，やや学術的な本（社会学）などでも，こうしたことを注記で示す例をたまに見かける．

1.4　典拠を示すだけではなく，そのような理解にいたった調査そのものの経過を説明する．

＊最近，この手の注記が増えているようにも感じている．

1.5　説明事項の根拠だけではなく，それの参考文献を示す．

＊ある事項，例えば，インドのヒンドゥー・ナショナリズムを説明している箇所で，これについて詳しく知りたい場合は，これこれの文献があるよ，といったことを注記で示す．

3　本文の補足

1.1　本文でふれるには，やや枝葉になる議論を注記で示す．

＊藤田省三さんの本のように，本文より注記の方が重要な事項を書いてある例もあるが，……

1.2　古典等で解釈を示す．

＊一般に元のテキストを示し，その後ろに割書きして示す．中国では，儒教の経書の解釈を〈注〉（伝，箋（せん），解，学ともいう），さらに注を詳しく解釈したものを〈疏〉（つまり注の注）とよぶようです．

詳しく解釈したものを〈疏〉（つまり注の注）とよぶようです．

1.3　本文でふれた事項の参考事項を示す．

1.4　経済学関係などの本で，本文では言葉で説明し，注記で数式を用いて証明する．

4　言語の翻訳

4.1　外国語の文を日本語の文に翻訳して示す．

4.2　日本語の古文を現代文に翻訳して示す．

4.3　漢文を読む下し文に，さらに通釈文にして示す．

5　図版と表の注

5.1　図や表の出典を示す．

5.2　事項や数値の補足説明を行う．